

淡路大震災の救護に参加して

(徳島県精神科医療チーム参加)

平成7年2月25日～26日

2号棟6階

古 川 富美子

私達は地震後、ほぼ40日が経過した2月25日、26日に現地へ行った。情勢は、だいぶ落ち着きを取りもどしているとは言え、本四連絡橋の高速道路を津名まで走り、インターを抜け、一宮を通り、北淡町に近づくにつれ、家屋の倒壊や屋根がかわらのくずれ、石燈籠の落下等々、たった10秒間の地震のものすごさを見せつけられた。又、自衛隊の大型トラックが狭い道路いっぱいになり走り抜けていたり、隊員の方々が倒壊した建物の除去作業を一生懸命にしている姿も見うけられた。

私達は徳島県保健予防課の要請で精神科医療班チームのメンバーとして当院から三木佐知子精神科医師と精神科病棟勤務歴7年目の私と県保健予防課の米本氏と三人でチームを組み一泊二日の救護に参加した。徳島県医務課からは、保健医療班チームとして、内科的な診療を行っていた。こちらの方は2班あり、第1班は北淡東中学校を、第2班は育波小学校を拠点にし、浅野小学校、北淡西中学校の各体育館・育波公民館、育波漁協を私達と連絡を取りあい、巡回診療を行った。近々に仮設住宅が完成するとのことで、学校関係の非難所は、次々と閉鎖され、公民館とか町民センターの方へ移動する人もかなりおられるようだった。精神科のメンバーとして、どれだけ援助が可能か不安だったが、三木医師といっしょなので、とにかく聞き役になろうと思い、出かけた。前任者からの連絡ノートには、いろいろな事が書かれており、開設当初には、本当に大変だったようで、新淡路病院とも連絡を取り、入院させた人も数名いたようだ。

精神科とはやはり、一般の人には抵抗があるので<こころの相談室>と看板を掛け、診察を受けやすい様に配慮している体育館もあった。他の非難所でも、徳島県の医療チームですと声をかけ、具合の悪い所はありませんか、地震の被害はどうでしたか等、たずねると「こんな田舎までよう来てくれた、ありがとう」と皆、喜んでくれ、話を聞いていると時間のたつのを忘れる位だった。私達聞く方は、初めてなので一生懸命聞くことができた。A子さんは、いろいろ話を聞いてもらったので、気分が落ちついてきたと言い、A子さんも2回目訪れた時は、すっきりしたから、もういいとのこと。将来の心配もしていたのに大丈夫なのかと、私達の方が心配したり。

B子さんは、仮設住宅に入居できることになったが、ひとり者は他人と2人で住まねばならないらしく、三間あるけど出入口は1カ所、台所も1カ所、どう使えばいいか心配で、まだ、この広い体育館の多人数で助け合っている方がまだとも。どちらがいいのか、私達には判断しかねるが、いつかは震災前の生活状態に帰るんだとの心意気あり。ひと安心。C子さんは、神戸の病院に通っていたが、船は出ない、電車は動かない、いつが来たら神戸へ行けるのかと聞かれ、全く私達も返

事に困ってしまい、見通しつかないなあと、沈んでしまったこともある。又、内科チームに60才すぎの男性が訪れ、病気ではないんだが、アイ・バンクに登録したいが、どうしたら良いか、自分はDMがあり、一時は病に倒れた身であるが、できるだろうかと相談に来られた方もあった。内科の医師は、自分の名刺をその人に渡し、くわしくは連絡させてもらうからと話されていた。

地震後3カ月が経った今日、オウム真理教とか、地下鉄サリン事件とかが、おおいにマスコミにぎわしている。時たま、震災復興状況などが、テレビの画面に出ると、そうだ恐ろしい天災が数カ月前にあったのだと思い出すが、直接的な被害に会っていない私達には、早くも頭の中から薄らいでいるように思う。だが、震度4とか震度2とか、あちこちで起こっている。防災対策うんぬんと騒いだのを忘れかけている様に思う。このレポートを気に再度気を引きしめねばと感じる今日この頃である。

参 考

支援待つ人々に物資続々

県・日赤県支部・県内自衛隊

大型ヘリ食料満載

ピストン 空輸 毛布など陸路も出発

海上自衛隊小松島航空隊（小松島市和島町）や徳島教育航空群（板野郡松茂町）は十八日午前、地震の被災者救援へ神戸市内に非常食や救援物資のピストン空輸を始めた。

小松島航空隊では午前九時十五分、トリ飯や赤飯などの非常食約三千五百食（缶詰）を積載した大型ヘリコプター一機が長崎から到着。隊内や小松島南、坂野、和島島の各小学校と坂野中学校の給食施設を使っ

て加熱処理作業。正午前に約二千食を積んだ第一便のヘリコプターが海上自衛隊阪神基地（神戸市東灘区）に向けて飛び立った。順次ピストン空輸する。

徳島教育航空群では、同群が非常食として備えている缶詰食品やごはん類、佐世保、横須賀、大湊の各海自地方総監部が用意した缶詰計三万五千食分と飲料水六百リットル、灯油二百リットルを神戸市にある海自阪神基地隊にヘリコプターで搬送を始め

た。十九日も輸送を続ける予定。県救援対策本部（本部長・松田副知事）は救援物資として毛布二千枚を、洲本市の兵庫県総合庁舎にトラック輸送した。

また、淡路島の住民救済のため兵庫県災害対策本部から十七日深夜、県を通じて徳島、鳴門市と阿波郡市場町に飲料水の支援要請があった。このため、徳島市水道局は一・五リットル、鳴門市水道部

は二リットル、市場町は四リットルをそれぞれ給水車に積み、十八日午前、兵庫県洲本市の洲本合同庁舎の淡路福祉事務所に向かった。日本赤十字社県支部は十八日午前八時半、救護班の第二班（医師一人、看護婦五人、事務連絡員二人）を淡路島の北淡町に派遣。同班とともに毛布四百五十枚、日用品セット五百六十四セットも送った。

徳島青年会議所では、血液不足が予想されることから十八日午前、会員約二百人全員にファクスで献血の協力を呼び掛けた。

三好郡山城町上名の大工中島義憲さん（四十八）も同地区の約二十人が十八日午前、仲間から集めた善意の救援物資を淡路島の被災地に届けた。

物資はインスタントめん二百食や米などの食料品や、水九百リットル、衣類など。中島さんが運転する小型貨物車に積み込まれ、淡路島に向かった。



被災地へ送る救援物資を積み込む県や日本赤十字社県支部の職員たち（徳島市庄町3の同支部）



臨時診療所で活動続ける井宮医師＝北淡町富島、町民センター

仁術走る

北淡診療所・井宮所長

阪神大震災で大きな被害を受けた北淡町富島地区に震災直後から現地で臨時診療所を開設し、けが人などの治療に当たったほか、町内の犠牲者全員の死亡診断書を書いた医師がいた。とっさの判断で、治療を始めたその医師の戦歴は、そのまま町民の地震との戦いの

記録でもあった。

北淡診療所の井宮雅宏所長(三六)が、診療を始めたのは地震から約三時間後、妻と子供を避難させ、倒壊した家屋の間をぬって富島の町をしばらく歩き、人だかりを見つけた。見ていると、一人、二人と死体が出てきた。三人目は、担架がわりの畳に乗せられたおばあさん。まだ、息があった。「安定した場所で診療させてくれ」。消防団に頼み、軽トラックの荷台に乗せてもらおうと急いで人口呼吸を行ったが、間もなくおばあさんは息を引き取った。亡骸をじっと見つめながら、家族は「担架代わり」とはいえ、せめて畳の上で死なせてやれました」と一礼した。「その一家と、今会って話すと、涙が止まらなくなります」。

「この分だと、もっと負傷者が増えるだろう」と判断した井宮医師は、町民センター横の倉庫に臨時診療所を設け、長い長い診療を始めた。消防団の救出活動が本格化するにつれ、次々と患者が運び込まれて来た。「病院や診療所が患者であふれているのは十分予想できた」。死者は搬送せず死体安置所へ、傷の深い者は応急止血をしたうえで県立病院へ運ばせた。必要な場合は、その場で縫合も行った。

死因はほとんどが圧死。運ばれてくるまでに、生死の勝負はほとんど決まっていた。その中で、心臓は止まっているのだが、まだ体が温かいケースもあった。付き添いの家族は「血色もいい。先生、何とかありませんか」と、懇願する。「何とか、家族の気持ちにこたえられないものか。生きてくれ」と願いながら、三十分間の心臓蘇生を試みたが、患者は息絶えた。「行方不明者がゼロになりました」。消防団員の声を聞いて、時計を見ると午後二時だった。消毒液も底をつきつつある状況下、日本赤十字社の徳島支部から応援が出たという知らせが井宮医師を支えていた。「もし、日赤がこっちに向かっていなかったら、診療が一段落したあの時点で臨時診療所を閉めていたかもしれない」と振り返る。待ちわびた日赤の医療団は、交通渋滞に巻き込まれ、予定より約三時間遅れの午後五時半ごろ到着。井宮医師のほか、事務員、保健婦がそれぞれ一人しかいなかった診療所に、医師一人と看護婦二人が加わり、薬、ベッドなども整った。それから夜中までかかって、井宮医師は、同町内の死者三十八人分の死亡診断書を書き上げた。臨時診療所は今も開業を続けている。

すかさず臨時診療所
不眠不休 全員の死亡診断書

次のお礼状は、救護活動終了後にいただいたものであります。

お 礼 状

拝 啓

昨日、今日と汗ばむ様な陽気で当町の山も点々と色づき、冬が去ったことに気がつきました。

中 略

昨日、北淡町最後の仮設住宅が完成し、避難所はほぼ解散、私も仮設住宅への引っ越しの最中です。あの1月17日、午後5時30分、日本赤十字社徳島県支部の皆様のあたたかく、かつ頼もしいお姿は決して忘れることができません。日赤の方々の御協力がなくてはあの救護所は1～2日で閉じていたと思います。物資がない、看護婦さん等のスタッフがいらない、そんな所に患者さんも来る訳がありません。先生方にも（佐藤先生、阪田先生）来ていただきながら、諸事情にて失礼しました。深くお詫びいたします。しかし、避難所を回っていて「日赤の看護婦さんはしゃきしゃきして、元気づけられるワー。」「あの赤十字（＋）をみただけで安心する。」との声を聞き、胸をはって「日赤いうたら看護婦さんの祖先であり、鏡のような存在で、出来は最高ですよ。（すいません、こんな表現して…）」と自分がほめられた様にうれしく答えました。

中 略

皆様方には、24時間継続という非近代的な勤務時間にかかわらず、本当によくして頂き、心よりお礼申し上げます。

北淡町はこれからです。住民自らがどこまで立派な町にできるか真価を問われる時です。是非立派な町並みをまた日赤の皆様にご案内させていただきたく存じます。私は頑張ります。

お疲れでませぬよう、益々のご活躍をお祈りいたします。

本当にありがとうございました。

敬 具

平成7年4月8日

北淡町育波480

北 淡 診 療 所

井 宮 雅 宏

次のお礼状は、本社副社長及び県支部職員が北淡町の復興状況を視察に訪れた際、いただいたものであります。

日本赤十字社のみなさまへ

北淡町震災医療応援のお礼

1995年1月17日兵庫県南部地震で北淡町は島内で最も大きな被害を受けました。

失ったものの多い反面、人のやさしさと力強さなど多くを学ぶ事ができました。

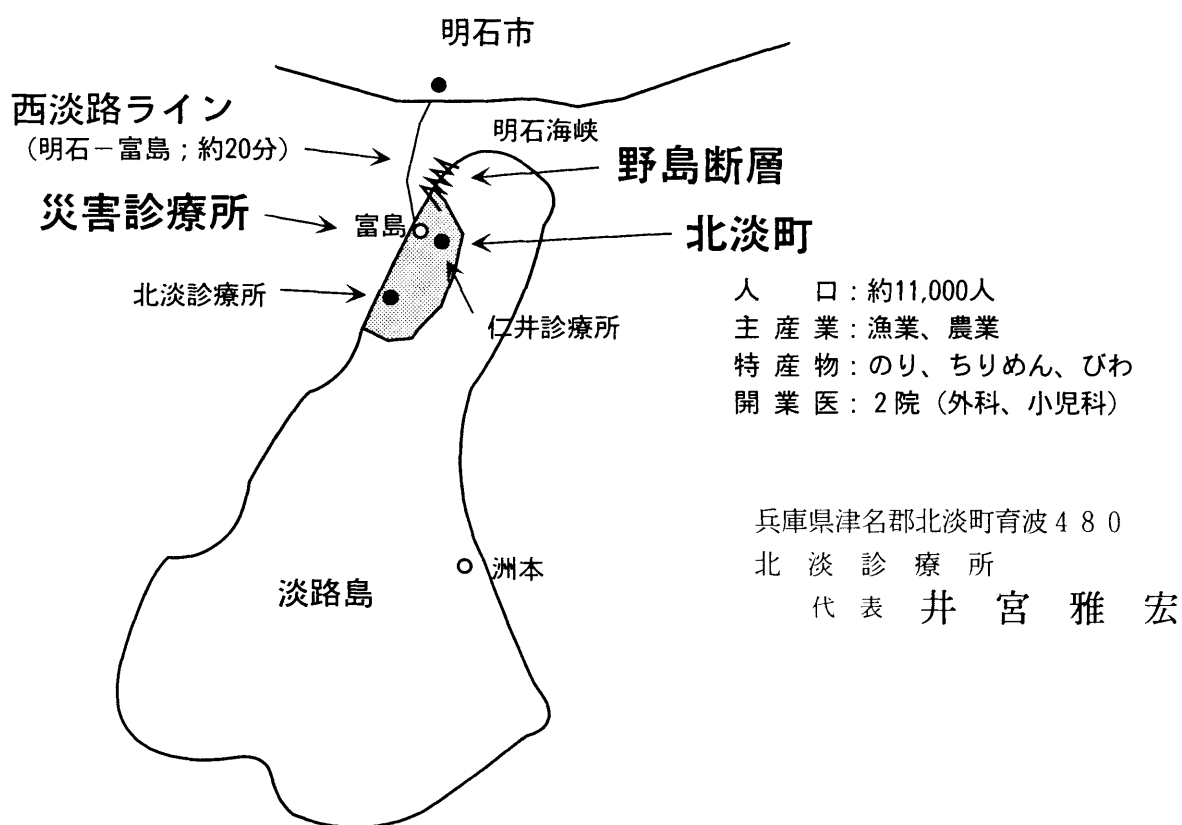
そのやさしさを一番実感したのは、自衛隊、日本赤十字社、そして多くのボランティアの方々のお姿でした。

まだ負傷者が続出しており、医療品はもちろん医療スタッフも極端に不足しておりました1月17日の夕方に日本赤十字社徳島県支部の皆様が医療品を携えてお越しいただいた時のうれしさは未だに忘れません。その後も約2ヵ月半におよぶ災害診療所での日本赤十字社徳島県支部の事務の方および看護婦さんの不眠・不休での鍛えられたお姿に後押しされ、町民と共に私たちも元気と明るさを取り戻し、今の姿まで復興することができました。

厚く御礼申し上げますと共に、私たち診療所の職員も町民に奉仕し、みなさまをめざして努力を続ける所存です。

本当にありがとうございました。

平成9年4月16日



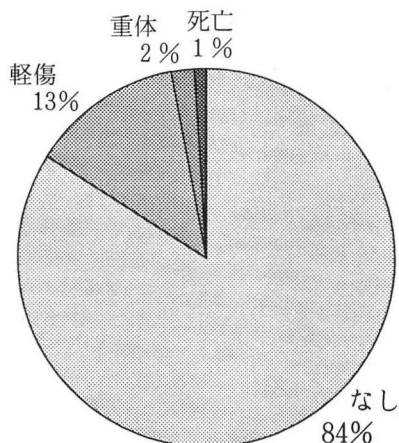
参考資料

1995年 1月17日 兵庫県南部地震による北淡町の人的被害と医療

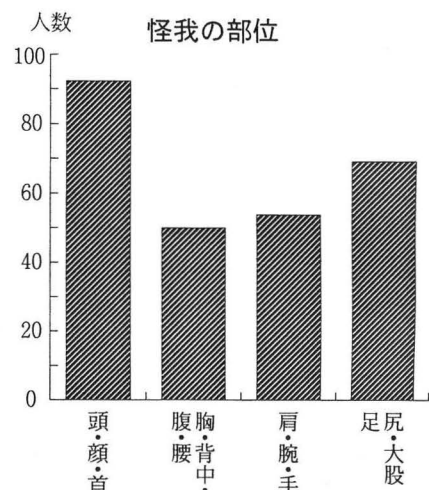
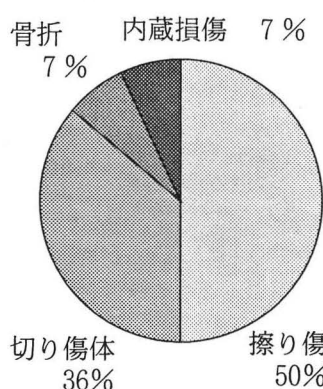
北淡町の医療を応援していただいた皆様：

日本赤十字徳島県支部、徳島大学、香川医科大学、高知医科大学、高松市簡易保険医療団、
兵庫県立淡路病院、徳島市医師会、個人的ボランティアの方多数

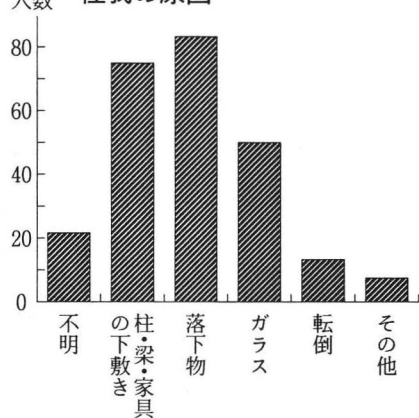
地震直後の怪我



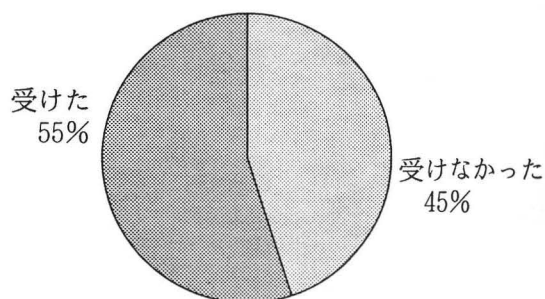
怪我の種類



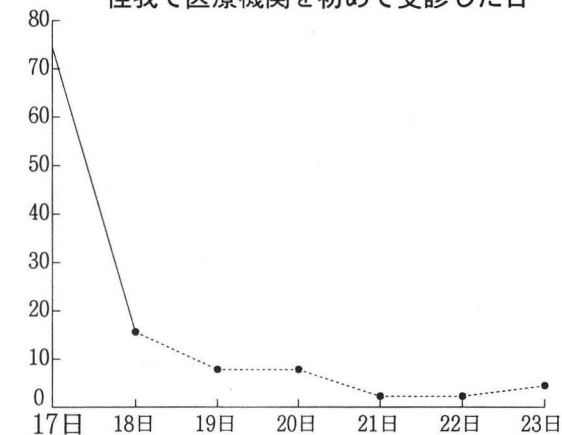
怪我の原因



怪我で医師の診察は？



怪我で医療機関を初めて受診した日



最初に訪れた医療機関

